Nagasaki Higashi
Global Report
International Department
GSⅡ 第７号
September 17, 2019

日本・ベラルーシ友好派遣団2019活動報告

高２国際科　木山慈斗、藤谷朋子、中山浩思、田川瑞希、峯本麻衣

私たちは７月２４日から８月４日までの１２日間ベラルーシ共和国を訪問しました。長崎県のほか北海道、福島県、宮城県、大阪府、広島県、岡山県からおよそ１５０人の高校生が参加したこの派遣団での体験について報告します。

研修２日目～８日目　キャンプ地　“Zubryonok”

最初に滞在したズブリョーノックという場所は、日本でいう自然の家のような場所で、私たち日本人だけでなく、ベラルーシ国内やトルコから訪れていた、同じ年代の若者がたくさんいました。ズブリョーノックでは、毎日、朝の体操、健康プログラム、ディスコ（写真左上）、夜のたき火を行い、他にも、毎日違ったプログラムを行いました。また、ズブリョーノックは緑豊かな場所で、「ヨーロッパの肺」と言われています。その豊かな緑を活かして作られた「ターザンパーク」では、フィールドアスレチック（写真右上）を、またキャンプ場近くのナロチ湖ではモーターボート乗船体験（写真左下）を行いました。これらの活動の合間には、英語を使って現地の若者たちと学校生活や趣味のことなどを話し合いました（写真右下）。

（中山）

健康リハビリ

私たちは、ズブリョーノックに滞在していた間、毎日、健康リハビリというプログラムに参加しました。私たち長崎メンバーは、昨年度本校を訪問されたベラルーシのルスラン・イエシン駐日大使とのご縁でこの研修に参加させていただきましたが、本来この研修は、２０１１年３月に発生した東日本大震災を始め、ここ数年間で災害の被害を受けた地域の高校生を対象とし、彼らが災害の傷を癒すために有効とされる治療が組み込まれていました。治療の例としては、強い酸味のために飲みづらかったですが、１杯で森林浴３時間分の効果があるとされている「酸素カクテル」（写真）や、霧状の塩を吸引する塩サウナ、アロマの部屋、ジャグジーやマッサージなどがあり、多忙なスケジュールの中ではリラックスできる時間でした。（田川）

ベラルーシの文化

私たちは、キャンプ場内の古代文化センターを訪れてベラルーシの文化に触れました。古代文化センターでは、民族衣装を着た女の子たちが伝統的なダンスを披露してくれただけでなく、途中で、私たちの手を取ってダンスの輪に入れてくれました（写真）。突然のことに戸惑いながらも、見よう見まねで踊って、ベラルーシの文化を体感できました。ここでは他にもベラルーシの伝統料理のドラニキ（ジャガイモでできたパンケーキ）を食べたり、ベラルーシの伝統工芸品を作ったりしました。（藤谷）

日本文化の紹介

現地の子供たちへの日本文化紹介では、長崎についてのプレゼンテーションを行いました（写真左）。プレゼンテーションでは長崎の地形、食べ物、お祭り、世界遺産、原爆の悲劇について説明し、私たちの故郷の良さを発信しました。また、長崎の伝統的な歌である「でんでらりゅうば」を披露し（写真下左）、温かい拍手をいただきました。次に、日本の文化として、現地の方たちの名前を漢字で表してあげたり、浴衣の着付け体験をさせてあげたりしました（写真下右）。これらの活動を通して、ベラルーシの子供たちと色々な話をし、交流を深めることができました。（峯本）

研修9日目～11日目　首都“Minsk”訪問

ズブリョーノックを後にして、ベラルーシの首都であるミンスクを訪れました。そこには、世界遺産であるネスヴィシュ城やミール城の他にも、たくさんの歴史ある建造物がありました。私たちは、現地の方の丁寧な説明を聞きながら、日本の風景とはかけ離れた、ミンスクのソ連時代の共産主義の名残のある整然とした町並みを肌で感じることができました。ベラルーシと長崎には一つの共通点があります。それは、長崎は原爆で、そしてベラルーシはチェルノブイリ原発事故で、ともに放射能の被害を受けたということです。ミンスクの中心街には長崎の浦上天主堂から送られた鐘のレプリカ（写真左）があり、大切に保存されていました。また今回私はベラルーシの教育省を訪問し、教育大臣にお会いする機会もいただきました（写真右）。日本ではできないような経験をさせていただき、多くの刺激を受けました。この研修で学んだことを、これからの生活に活かして、日々の生活をより一層充実させていきたいと思います。ベラルーシでの１２日間は、生涯忘れることのできない日々となりました。このような機会を与えていただいたことに、心から感謝いたします。（木山）